『歴史放談』

郷土史の裏面から見た
藩主の人物像

林　寅　喜
（会員　佐伯市中の島）

佐伯史談会が発足して五〇年以上になるが、これまでに会員諸氏が佐伯藩歴代の人物像について、寄稿した史談の内容を見る限りでは、好評ばかりで批判したものは余りない。これは他の郷土史や資料等も同様である。

私は、これに少なからず疑問を抱き『人生には必ず表裏がある』という信念から、この度郷土史を参考に初代・六代・八代の偉業を掘り起こし、裏面から見た真の人物像を探求して、私の独断と偏見で綴って見た。

★高政について

一、築城候補地の選定

慶長六年（一六〇一）二月佐伯入りした高政は、居城の築城候補地として徳川氏＝幕府（以下幕府という）に対し、

第一候補地　女島山
第二候補地　八幡山（城山）

を提出し、裁許を仰いだ。

註　家康は慶長八年征夷大将軍に任ぜられて江戸に幕府を開いたので、この時は徳川氏と言うことになる。

高政は提出に際し『一は外され二が許される』という幕府の手の内を読んで、念願の八幡山を敢えて第二候補地として提出したというが、これは一寸出来過ぎの感があり、また、高政にそれ程の才覚があったかも疑問に思う。

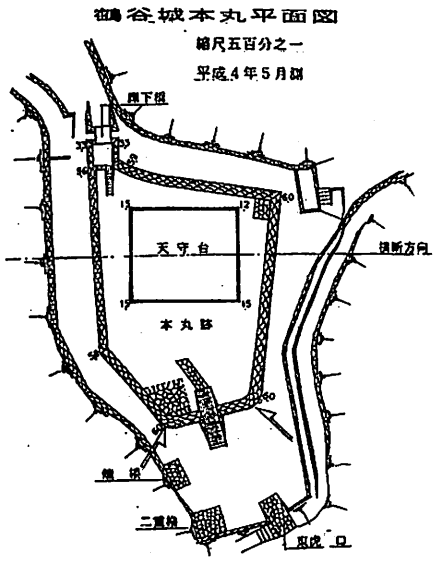
高政は天正一四年（一五八六）三月、大友宗麟からの援軍要請による秀吉の動員令で、日田・玖珠に在陣し、文禄元年（一五九二）朝鮮出兵で改易となった大友義統の後を受け文禄三年日田・玖珠で二万石を与えられた。

この後佐伯入封までの六年間に角牟礼城を修築したという。角牟礼城は中世の山城で、標高五七七㍍麓からの比高が二五〇㍍と、八幡山とは格段の差があり、工事は難航し途中で放棄したと考えられ、天守は手付かずに、大手・

三の丸他の石垣を残す未完成で終わった。

これを指図した高政は、山城の築城は並大抵ではないということを、肝に銘じていた筈である。

《平面図》



候補地の比較

女島山の地勢

標高六一㍍東西二〇〇㍍南北五〇〇㍍の独立した小島東と南に海浜が開け周囲は海面（天然の堀）で囲まれ、容易に攻略できない。したがって、資材の搬入や人夫の出入りは舟に頼らねばならなかったが、木材の筏流しや築石などの持ち込みは、陸路とは比較にならない位条件に恵まれ、作業の工程上も問題はなかった、と考える。

八幡山の地勢

標高一四四㍍の独立峯で防ぎ安く、身の安全を計られ高所からの睨みが効き、場所としての条件は良かったが資材の搬入は困難を極める。と考えていた筈である。

以上から高政は、八幡山より女島山の方が立地条件に恵まれていると認識し、第一候補地として上申したのではないか。

しかし、幕府の裁許は八幡山とすることで認められたため、それは『始めから手の内を読んでいたから故意に八幡山を第二候補地として裁許を仰いだだけ』などと釈明せざるを得なかった、と考える。

この慶長期以降の築城は、中世の山城は廃れて平山城や平地城へと移行していた時代、高政も武将ならこのことは知っていた筈である。

当時前後して豊後に移封した臼杵・府内・日出・杵築（但し二六年後）の各藩共、居城は平地または平山城で佐

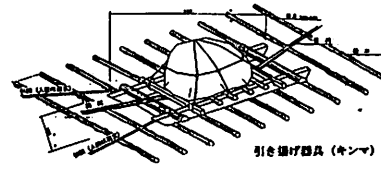
伯藩のみ旧来の山城に固執して故意に上申し、時代を読み取れなかった高政の築城は、失策であったとしかいい様がない。

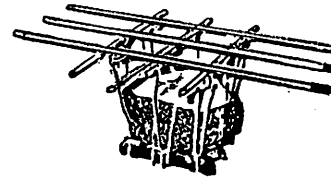
二、鶴谷城の石垣

鶴谷城（鶴屋城）は、慶長六年入封した高政の発想により、領内二六ケ村の農民を駆使して四年の歳月をかけ完成させたが、今は建造物はなく石垣を残すのみである。その全容は

敷地総面積　五五七五米
うち　本　丸　七七〇、〇平米　石垣高五、七メートル
　　天守台　九一、二平米　石垣高一、五メートル
　石垣と石畳　総面積　凡そ七、三〇〇平米
　使用石数　石垣　凡そ二二、〇〇〇個
　　石畳　凡そ一六、〇〇〇個

使用した石は大小様々で、最大一トン以上の石はなく、七～八〇〇キロ前後が最多のようである。これ等はすべて一個一個別図のような器具を用いて、担ぎ揚げるか引き揚げたと考えるが作業に従事したのは一五歳から五〇歳位までの強健な男子農民であったと思われ、その人数は村高に応じて夫役させていたようで、近郷は現場作業、奥村は木材の伐り出しから集積、筏流し、漁村は石材の採取持込みとそれぞれ分担させていたのではないか。





担ぎ棒模型　10分の1
前肩6人後肩9人左右6人計21人
石重量780 kg 1人当り負荷重＝37 kg

こうして完成した石垣のうち、本丸の正面東側（前図）矢印の部分は丸味を帯びて隅石になっていないが、反対の西側と渡櫓は隅石である。ところが東側は西側と違い石垣の左右との交叉が直角ではなく、多少鈍角になっているが、隅石に出来なかったとは思えない。

では、なぜ丸味をつけたか。理由は視覚を広げて敵の侵入を察知し、防御し安くするためであったというが、天守

の直下まで攻め込まれた武将にとっては、生死の瀬戸際で、視覚の問題など論ずる余地はないと思う。これも単なる理屈に過ぎない。

ではどうして隅石にしなかったのか、理由は適合する石が揚がって来なかったからではないか。隅石は矩形に近い立方体ではないと仕えない。したがって、石集めの時点から工面する必要があったと思うが、その指示伝達が不十分であったか、あるいは資材（転石・野面石・自然石）不足のためか、何れかであったと思う。

作事方の羽山勘右衛門が石垣積みのことで高政の勘気にふれ、鉄砲で撃たれ死亡するという事件があったが、原因はこの辺りにあったかも知れない。

三、高政の触れ書き

高政は佐伯入封後の慶長九年（一六〇四）頃から村浦の長（おさ）に対し、一〇〇通余の触れ書きを発給している。（温故知新録）その内容は身分を安堵し、開墾を奨励して農作業の細部に至るまで指示するといった、きめ細かな内容である。

この中で元和六年（一六二〇）から九年にかけて浦方の長に対し、今日的にいえば漁業権や魚付保安林保護の原形ともいえる内容の文書を、九通発給している。

これを読むと、高政は漁業に対する認識が極めて高かったように思うが、これも少々過大評価と考える。

その理由を説明すると、

高政は永禄二年（一五五九）尾張で生まれたが、その生地は三カ所あって判然としない。

1開東郡荒子荘花筏村（鶴藩略史）

ここは当時前田家の支配地であったが、花筏村という地名はない。

現在＝名古屋市中川区

2中島郡刈安賀（一宮市史）

高政の父高次が兄政次と共に、近江国愛智郡鯰江（えち なまずえ）庄からここに移住したと伝える。

現在＝一宮市刈安賀

3愛智郡御器所（森秀郷著　森族について）

高次が秀吉に仕え御器所・末森・古渡を支配していたと記す。

現在＝名古屋市昭和区

右は三カ所共内陸部で、高政は生後海など知らずに育

ち、文禄二年（一五九三）朝鮮出兵の際海上の輸送方を勤めたといい、この時初めて海を知ったと思うが、漁労の何たるかは知るよしもなかったと考える。

さて、高政が発給した在方宛の触れ書きは、主として慶長一三年～一四年の間に集中している。

一方、浦方宛の触れ書きは元和六年～九年の間で、慶長の触れ書きから一〇年以上後に発給された事になる。

その内容は、高政も知らなかった事を浦方から聞かされて始めて文書に認めたと考えられ、また、文面には漁民の不利益になるような条項は何ひとつなく、前記のように現在でも通用する事項は、漁民でなければ到底知り得なかった。

従って、高政が漁業に精通していたということではなく、浦方からの入れ知恵であった、と考える。

★高慶について

高慶は佐伯藩一二代藩主のうち名君であったといわれるが、果たしてそうか、その偉業から二点選んで解説してみたい。

一、百姓逃散と走り

逃散は百姓が為政に納得せず、一村または二村申し合わせて妻子を連れ、田畑屋敷を捨ててその村を立て退くことをいい、走りとは家族または個人単位で立ち退く場合を言う。

註　逃散は農民が藩政に対して行う無言の抵抗であった。一方、藩としては多勢で村を空けられると生産は低下し、労働力も不足するので、有力な寺の仲介によって帰参を許していたが、首謀者は見せしめのため罰せられていた。

これを見ると、佐伯藩二六八年の藩政の中で、百姓逃散が一二回、一揆が一回の計一三回もあり、うち高慶の時七回で、全体の六〇％を占める。

これはどういう訳か、勿論高慶は歴代中在任期間が四三年と八代高標の四一年を凌ぎ最長であった。

しかし、七回にも及ぶ逃散は六年に一度ということから、異常であったとしか考えられない。

高慶も、その間藩政改革を行い、専売制度を設け産業高慶も、その間藩政改革を行い、専売制度を設け産業を奨励し、藩士の俸禄カットなども行っているが、幕命による普

佐伯藩の逃散と走り百姓

代	年号	西暦	在村	他領村名	軒数	人数
4	寛文9	1669	下直見村			48
〃	延宝2	1674	下直見村	与左衛門他		48
				喜左衛門他		
6	享保11	1726	因尾村	岡領宇目郷		198
			堂ノ間	岡領酒利村	45	199
			赤木村	日向	4	18
			落野浦	臼杵領浦代浦	4	28
	元文4	1739	下野村	延岡領から帰参		46
	寛保元	1741	上野下野	岡領千束村	7	63
			大坂本村	臼杵領	13	45
				波津久村		馬5匹
7	寛保2	1742	古江村	臼杵領中津浦	14	71
	寛保3	1743	下野村	岡領見明村		200
	延享4	1747	八戸村	臼杵領東神野村	14	54
10	文化9	1812	百姓一揆	因尾村他		
				五ケ村		

請出役の出費などで、藩の財政は火の車であったことは理解出来る。

一方、農民は前後八回もの天災により減収を余儀なくされたが、年貢の収納は藩の財源不足を理由に、容赦なく取り立てられたので苦しみは頂点に達し、その挙句が他領逃散という暴挙に至ったのではないか、つまり高慶は農民から総スカンをくっていたわけで、多少の善政はあったにせよ、名君などという敬称は適切ではない、と思う。

二、御郡廻り

この目的は藩主が就任後、領民に対しての挨拶廻りであったとされるが、六代の場合三度も廻っているので、強(あながち)ちそうとは言い難い面もある。佐伯藩は初代を除き五代までは病弱か短命のため記録は残っていないが、むしろ実態は制度そのものがなく、六代になって制度化されたのではないかと思う。

御郡廻りは代官所からの廻文によって行程が示され、日数は在方と浦方の二回に分けて、四泊から六泊程度であったようだ。在浦では代官所の指示に従い道筋の整備

歴代御郡廻記録

藩主名	巡視年号	年齢	就封後経過年	在位年数
六代高慶	元禄一四	二六	二	四三
	享保一〇	五〇	二六	
	享保一八	五八	三四	
七代 高丘	宝暦 元	二三	九	
八代 高標	安永 四	二〇	一五	一八
九代 高誠	文化 二	二九	四	四一
一〇代 高翰	文化一二	二〇	三	一一
一一代 高泰	天保一〇	二四	六	二〇
一二代 高謙	不詳		民情視察に変	三〇
				九

天災記録　六代高慶の時代

年号	西暦	減収石高	適用
元禄一三	一七〇〇	五、〇〇〇	
元禄一五	一七〇二	五、三五一	
正徳 二	一七一二	一三、四六〇	
正徳 三	一七一三	七、一一〇	
正徳 四	一七一四	六、四六〇	
享保一四	一七二九	六、一二一	虫害
享保一七	一七三二	一七、〇〇〇	
元文 四	一七三九	六、二九六	

橋の架け替え、隣村との峠越えには仮小屋を建て、籠には休息所を準備し、係役人の点検を受けなければならなかった。

また、藩主の宿泊所では座敷廻りや庭垣根等で目障りになる物件の除去、浦方の場合は渡船場の整備、在浦とも家臣の宿泊所確保など準備した。

当日は村役人が村界まで出迎え、荷物運びのため六〜七〇人村人が同行し、宿泊所では献上品を差し上げて歓待した。

これに対し、藩側からは宿泊代が祝儀として一貫文、昼食代が五〇〇文支給されただけで、随行藩士六〜七〇人の賄い料は出なかった。ただ、九〇歳以上の老人へは米が支給されたが、これは限られた村でしかなく在浦からの上申（陳情）など一切なかったようである。

翌日も隣村界まで案内と荷物運びで同行し終了したが、村浦の出費と出役人夫数等合わせると負担は大きかった。これが在任中三度も行われており、農民から見た挨拶廻りも、さぞ迷惑であったろう。

★高標について

一、四教堂のこと

四教堂は宝永初年に発足した藩の学習所を、安永六年（一七七七）四教堂と改名して高標が開講し、閉講は明治三年（一八七〇）の版籍奉還時と推定すれば、九三年の歴史となる。

塾長は家老が勤め、教頭は側用人講師は藩士の中から選ばれ、塾生は凡そ三〇〇人位いたという。

この他に特任講師ともいうべき人が寛政六年（一七九四）に出仕した松下筑陰を始め五人いたが、出仕は文政の中期以降に集中し、前半は不在の期間が三二年間もあり、全体的に見て特任講師の出仕は不均衡で、バランスの取れた教育ではなかったと理解する。

二、佐伯文庫のこと

佐伯文庫は天明元年（一七八一）高標によって創設された。高標は大叔父の浪江（図書）の薫陶を受け、学問の道に励んだといわれ、藩主となってから書籍の蒐集を始め、天明元年頃には概ね終了していたという。

その内容は

種類　二、七一二種
冊数　三三、五五八冊
巻数　七七、一一〇巻となっている。

（梅木幸吉著　佐伯文庫の研究）

ところが佐伯藩では八万冊と流布されており、その元凶は明治になって平山小文治が編纂した『鶴藩略史』下巻に八万本と書いてあるため、これが巷で冊に読み替えられたと思う。

次にこの文庫本の運用と管理の実態を考えて見る。

今市立図書館に収蔵されている書籍は、一般と児童文庫を合わせて九万冊という。とすれば佐伯文庫はその三分の一に相当し、当時としては莫大な冊数である。

これを凡そ八畳程度の建物二棟（明治四年屋敷図参照）に収蔵し、二棟共棟木に達する程積み上げられていたというが、それは事実であったろう。貸し出しは高標が生存中は大名間で行っていたといわれるが、一般にはその形跡はなく、四教堂の教材か塾生への貸し出し程度ではなかったろうか。

では高標は一体文庫開設から死亡するまでの二〇年間に、どの位読破し得たであろうか。考えてみると藩主とも

なれば、先ず政務を見て次に参勤を行い、その旅程に四五日程費やし、在府の一年間は五節句と朔日及び一五日は江戸城に出仕せねばならず、翌年帰藩の節も旅程は同じながら在藩中は公務もなく、余暇を割いて雅（が）えん（動植物図鑑）の編集をしていたというから、毎日読書ばかりで過ごしたとも思えず、目録だけは購入時に目を通していた筈であるが、収蔵冊数は何程も読破することなく、書庫に積み上げられたまま死亡した、と思う。

一方、収蔵本の防虫管理に関しては藩としても細心の注意を払わねば成らず、このことか引き金となって四七年後の幕府献上に結びついた、と考える。

三、文庫本の取得について

高標が書籍購入に熱を上げていた頃、佐伯藩の台所は火の車であったと思う。当時は打ち続く天災により稲作は減収の一途を辿っていた。その内容は次の通り。

このような天災による減収でも余程の事がない限り、年貢の減免は藩財政に影響を及ぼすので認められず、未納分は次年に先送りされていたから、農民の困窮は察して余りあるものがあった。一方、藩でも俸禄のカットなど実施したが、にも拘わらず高標はセッセと書籍を買い漁っていたから、正気の沙汰とは言えず、藩債（借金）は増える一方であったろう。

天災記録　八代高標の時代

年号	西暦	減収石高	その他の事項
安永三	一七七四	八、三〇〇	
安永四	一七七五	一〇、二五二	四教堂開講
安永六	一七七七	七、五六五	
安永九	一七八〇	一〇、一三二	佐伯文庫創設
天明元	一七八一	七、八三二	天明の飢饉
天明二	一七八二	一〇、二二九	天明の飢饉
天明三	一七八三	五、六七二	天明の飢饉
天明五	一七八五	一〇、八五五	天明の飢饉

註　文庫本は天明元年には概ね終了していたというが高標が将軍に拝謁した一六歳から一〇年、四教堂開講から四年しか経っていないので、費用面から推定すると少し無理があった様な気がする。

因みに、この時から五七年後の天保九年には、藩の借財は一〇万両にもなっていたという（高松浦庄屋文書）から、前々から借財は抱えていた、といえよう。

四、残存本の実態

幕府へ献上　二〇、七五八冊
県立図書館蔵　四六冊
市教委保管　一四二冊
池彦亭土蔵　二、七七八冊　現在は市教委保存か
所在不明　九、八三四冊

これによると佐伯文庫は、九、八三四冊もの所在が今以て不明であり、理解できない。それは明治になって散逸したとされているが、焼失ならいざ知らず、少なくとも数冊単位かそれ以上で至る所に残っていなければならない、と思うからである。

五、幕府へ献上の二万冊のこと

文庫創設から四七年後の文政一一年、藩主高翰の時、文庫本を幕府に献上した。

それは天領一〇ケ村、二、〇〇〇石との交換が目的であったとされる。この時献納について協議したであろう藩の首脳の中に、当時四教堂に出仕していた中島子玉も同席していたと思う。

その上で書籍の利用に就いて協議したと考えられ、貴重本とはいえ内容が高度で佐伯藩では利用されず、むしろ管理保存に手数がかかると判断して、献納に踏み切ったのではないか。

さて、天領二、〇〇〇石との交換を考えた時、二万冊にそれなりの価値がないと『お上を愚弄するな』と一喝されるから、値踏みはしていたはずである。

そこで、天領二、〇〇〇石の価値を検討して見ると、当時米一石の価格は一両強であったから、二、〇〇〇石の総生産額は概ね二、〇〇〇両と踏んで、二万冊あればその程度の価値は十分にある、と考えたと思う。

でなければ何の目的もなしに献納する理由などない。

結果は見事に外れて時服一〇着と、鞍と鐙が下賜されたが、佐伯藩が管理していたら行く末は想像し難く、今は幕府から国立図書館へと引き継がれ、保存されているのがせめてもの慰みである。

六、高標は学者大名か

高標の学者大名は佐伯では通用するが、残念ながら三百諸侯の間では通用しない。その内容は次の通りで、研究材料が違う点である。

文学大名と学者大名

文学大名

氏名	藩名	代	石高	学問の内容
池田定常	因幡若葉	五	一、五万	家譜・系譜と地誌学に精通
市橋長昭	近江仁正寺	七	一、八万	四書五経と小学近思録等精通
毛利高標	豊後佐伯	八	二万	書籍収集と雅えんの編集

学者大名

氏名	藩名	代	石高	学問の内容
土井利位	下総古賀	九	二、三万	雪の結晶体研究
朽木昌綱	丹波福知山	八	三、二万	蘭学者
大関増業	下野黒羽	二	一、八万	鍍金（メッキ）術の研究
増山正賢	伊勢長島	五	二万	水理学と虫類の研究

しかし、三百諸侯（文化文政期では二六四家）の歴代を一〇人と仮定しても、二、六〇〇人余となる。この中から一芸に秀で頭角を現すことは容易ではなかった。

高標が学者大名ではなく、文学大名と評価されただけでも佐伯藩の誇りはあったと思うが、彼が開いた佐伯文庫の陰で重税に苦しんだ農民や、倹約を強いられた藩士のことを忘れてはならない。高標一人のための学問ではなかった筈だから。

むすび

郷土史は表だけ見て鵜呑みにすると、間違った形で納得してしまう場合がある。そこで裏を返して別な面から調べていくと、違った形の歴史や人物像が見えてくる。そういった観点から私の考えを主体に書き綴った次第である。

参考図書（文中で紹介以外）

鶴谷城春秋記（南海新報社）
郷土歴史年表（汐月三代吉）
御郡廻り御用日記（佐伯藩資料）
佐伯史談二一〇号（高山善吉遺稿集）
大分歴史事典（ＯＢＳ大分放送）
藩史大事典（雄山閣）
お金の百科事典（新人物往来社）
歴史読本日本人物総覧（新人物往来社）
古文書用語事典（新人物往来社）
別冊歴史読本　江戸三百諸侯列伝（新人物往来社）
別冊歴史読本　戦国九州軍記（新人物往来社）